帝京大学宇都宮キャンパス研究年報人文編 第18号（2012）pp. 39–59

WebCT を用いた英語文法問題の実施結果の分析

前　原　由　幸

WebCT を用いた英語文法問題の実施結果の分析

前原 由幸

1. はじめに

帝京大学には WebCT というコンピュータネットワークを用いた教材配信システムがあった[1)]。そこにはアセスメントという機能があり、アンケートやテストを行えるようになっていた。この機能を使って、授業の一部として 2010 年度後期と 2011 年度前期に英語の文法問題を実施した。文法の理解度を調査することを主目的としてはいなかったが、実施後に得られてデータを見ていくと、文法についてどの程度理解しているかがうかがえることがわかった。そこで、本稿では実施結果を分析し、誤答の目立つ部分と誤答の傾向を指摘していく。

2. 問題の作成と 実施方法

2.1 問題の作成

文法問題は、文法項目別に次の 12 のユニットに分けた。

Unit 1 名詞・代名詞・冠詞・形容詞・副詞
Unit 2 接続詞・前置詞・熟語
Unit 3 語順
Unit 4 文型
Unit 5 時間の表現法①：現在形、過去形、進行形
Unit 6 時間の表現法②：未来、完了形
Unit 7 助動詞・疑問文・否定文・命令文
Unit 8 受動態
Unit 9 比較
Unit 10 動詞を他の品詞に変える①：不定詞
Unit 11 動詞を他の品詞に変える②：分詞・動名詞
Unit 12 関係詞：関係代名詞・関係副詞

問題の内容は中学、高校の既習事項である。授業の一部として既習事項の復習を主な目的とした問題である[2)]。各ユニットが 4 から 6 問の大問で構成されている。大問には、数問の小問が含まれている。それぞれの問題に得点を設定し、各ユニットが合計 100 点満点になるように作成した。得点は成績評価の一部として組み入れた。

2.2 実施の方法

2010 年と 2011 年の後期に柔道整復学科の「基礎医療英語 2」で、2011 年度の前期に理工学部の「英 1」で実施した。対象となった学生数は合計で 231 名である。授業時間内で解答させたのではなく、授業時間外で解答させた。WebCT のアセスメントでテストを実施する場合には解答回数を設定できる。今回は 2 回解答できるようにした。解答回数を 2 回にしたのは、繰り返し取り組むことで、誤りを正しながら高得点を目指してもらいたいと考えたからである。2 回目を解答する場合は全体を繰り返すことになるので、正解した問題も繰り返すことで定着がはかれる。2 回受けた場合には、2 回目の得点が最終的な得点になる。今回の目標はこれまでの学習の復習にあったので、このような方式で実施した。

2.3 得点の集計

学生にはテストを受けられる期間を告知しておき、期間が過ぎた時点で集計を行った。集計すると様々なデータが入手できる。

集計結果から履修した学生すべてが 12 ユニットに解答したわけではないということがわかった。平均では 11 ユニットに解答している。事前に設定しておいた配点をもとに得点を集計すると、全体の平均点は 775 点で、最高得点は 1187 点であった。12 ユニットの中で 5 回は最高得点が 98 点であるが、他はすべて 100 点が最高得点である。各ユニットの平均得点は、次のようになる。

Unit	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均点	67	63	64	70	63	75	80	64	71	68	72	59

記録されるのは、このような全体としてのデータだけではない。個人別の集計のデータと問題別の集計のデータが記録される。本稿では、問題別のデータを使い学生の理解が不足していると思われる部分を探っていく。

2.4 問題別の集計

集計されたデータの中に問題別の解答の一覧がある。どの学生がどの問題にどのように解答したのかが記録されている。このデータを用いて、事前に設定した配点からではなく、447 題の一問毎の正答率を算出した。この正答率の低い問題を調べることで、理解が不足している思われる部分を見つけ出した。また、記録されている解答からどのような誤り方をするのかも調べた。ユニットは文法項目で分類されているが、文法項目とは別の観点からどのあたりの定着が不十分であるかを探っていく。

ここからは、正答率として百分率をあげていくが、次の 2 点に注意が必要である。

集計にあたっては、2 回受けた場合には、2 回とも集計に入れてある。2 回解答した学生は正答率を上げているものと考えられる。2 回解答した学生の比率は、次のとおりである。

	受験者総数	1 回目受験者数	2 回目受験者数
unit 1	308	231	77
unit 2	299	230	69
unit 3	278	226	52
unit 4	255	219	36
unit 5	273	219	54
unit 6	251	219	32
unit 7	244	219	25
unit 8	250	219	31
unit 9	241	220	21
unit 10	241	217	24

unit11	234	208	26
unit12	243	204	39
合計	3117	2631	486

また、全員が大問に含まれる全ての小問に解答したわけではない。解答していない学生も集計には含まれている。例えば、問題が 5 題あるが 3 題しか解答していない場合でも残りの 2 題の問題の集計には含まれている。絶対的な数字を出すことが目的ではなく、相対的に評価することを目的としたので、このような集計方法を用いた。

2.5 問題別の正答率

問題は 447 題あり、全体の平均正答率は 66.9%であった。ユニット毎に正答率をまとめると次のようになる。

Unit	1	2	3	4	5	6
正答率	68.4%	63.1%	68.0%	66.6%	62.8%	69.2%
Unit	7	8	9	10	11	12
正答率	79.9%	60.3%	71.0%	67.1%	71.1%	58.7%

上記の得点による平均と正答率の平均を比較すると順番に若干の差がでている。ユニット毎の正答率をあげたが、ここらはユニット毎ではなく、問題毎の正答率に注目していく。

最も正答率の高い問題は、次の問題である。正答率は、98.2%であった [3)]。

Unit 3-1(1) 次の英文の主語を選びなさい。

She was a pretty girl.

1. She　2. was　3. pretty　4. a pretty girl

逆に、最も正答率が低かった問題は、次の問題である。

Unit 2-2(5) 次の 2 つの英文に共通して入る単語を答えなさい。

Her birthday is three days (　　) yours.

The package arrived (　　) you had left.

この問題の正答率は、10.7%であった。

このような正答率に注目することで、正答率の低い問題から一定の傾向を探り、弱点と思われる部分を指摘していく。

3. 分析結果

正答率が 50%を割る問題を中心に分析を試みてみた。複雑な構文であるとか、複数のポイントを考える必要がある場合に正答率が低下しているように考えられる。文法規則が定着していないことがうかがえる。語形、文型・語順、文法項目、語彙に分けて、具体例を挙げ、誤答から一定の傾向を指摘していく。

3.1 語形

正答率の低い問題には単語の形を変える問題が多い。状況を読み取り、規則にしたがって語形を決める問題である。主語にあたる名詞や代名詞の人称、数だけでなく、時制なども考慮しなければならない。複数の要素を考えなければならないので、何かを見落としている誤答もあれば、規則を理解していないのではないかと疑われる解答もあった。

複数の要素に注目する問題をあげる。例えば、次の問題である。この問題は、会話が完成するように空所に適当な語を入れる問題である。

Unit 5-4(4)

A: (　　) your mother go to work on foot every day?

B: No, she (　　). On rainy days she (　　) to work by bus.

A と B の会話になっているので、それぞれの発言から形を決めるポイントを見つけていくことになる。A の方の空所は 53.8%の正答率である。誤答の数を数えてみると、be 動詞を答えている解答が 30 あった。一方、Does ではなく Do、

Did を答えた解答数は 29 であった。共におよそ 12%である。疑問文の作り方を誤った解答と、三人称、単数、現在という 3 つのポイントのどこかを見失った解答が約 12%ということになる。B の二つ目は goes の正解が 107 で、正答率は 39.1%である。went という解答は 17、go は 35 あった。合わせると、約 20%が、動詞は分かるが形を決める時に見落としがあったということになる。

次の問題では主語の名詞の数と時制が問題になるが、主語の数に注目してみる。

Unit 8-3(1) 次の各組がほぼ同じ意味になるように、空所に適当な 1 語を入れなさい。

They grow a lot of coffee in Brazil.

A lot of coffee (　　) (　　) in Brazil.

上の方の文から現在時制であることを、主語の名詞から単数であること見分けることになる。正解は is で解答数は 57 になる。誤答を見ると単数で過去と考えた was が 39 あったが、複数と考えた are は 55、were は 37 に登った。単数とする解答と複数とする解答がほぼ同数になっている。A lot of coffee が単数扱いであるという規則が十分には理解されていないことがわかる。「たくさんのコーヒー」という日本語からの類推で複数扱いにしているのかもしれない。

語形が関係してくる文法項目がある。例えば、関係節である。関係節内の動詞の形を決める問題になると誤りが目立つ。次の問題は、who were singing が正答になるが、中央の were は前にある girls と後の looked をヒントに形を決めることになる。

U12-3(3) 次の各組がほぼ同じ意味になるように、空所に適当な 1 語を入れなさい。

All the girls singing on the stage looked happy.

All the girls (　　) (　　) (　　) on the stage looked happy.

217 の解答の中で、正解の were の解答は 53 あり、約 24%である。are の解答

数が 46、is が 39、was が 4 であった。過去形にできなかった解答が多いことがわかる。

一方、次の問題は複数が見落とされている例である。which were taken と入れるべきであるが、この問題では were の部分の正答率が低い。were という解答が 55、are が 22、was が 28 で is が 44 であった。単数と考えた解答が 72、複数と考えた解答は 77 である。現在と考えた解答は 66 で、過去と考えた解答は 83 である。関係詞が関係節内の動詞の主語にあたる場合は先行詞の名詞に合わせて動詞の語形を決めるという規則が理解されていないのかもしれない。

> Unit 12-3(4) 次の各組がほぼ同じ意味になるように、空所に適当な 1 語を入れなさい。
> I will show you some photographs taken by my grandfather.
> I will show you some photographs (　　) (　　) (　　) by my grandfather.

これらの二題は関係節の問題であり、語形の問題でもある。また、主語と動詞という文法関係の問題でもある。こうした複合的な部分は、誤答が多くなっている。

関係詞以外でも進行形、受動態、現在完了などの問題の誤答の中には語形が関係している誤答が散見された。

語形は複数の要素が関係してくるが、いろいろな部分に注意が向いていないと推測される。

3.2 文型・語順

文型や語順が関係する誤答も目立った。文型については、「主語+動詞+目的語+補語」の文型を、語順については後置修飾を中心に取り上げる。

3.2.1 「主語+動詞+目的語+補語」の文型

文型の中で特に誤答が多いのは、「主語+動詞+目的語+補語」の文型である。例えば次の問題である。

Unit 4-3(5) 次の日本語文の意味を表す英文を選びなさい。

「彼女はガソリンスタンドで車を直してもらった。」

1. She had the car repaired at the gas station.
2. She repaired the car at the gas station.
3. She had repaired the car at the gas station.
4. She repaired the gas station for the car.

正解は 1 番で、正答率は 28.3%であった。解答の数は、1 番は 72、2 番は 78、3 番は 90、4 番は 11 であった。2 番、3 番は文法的には問題はないが、日本語の意味に合っていない。1 番の英文の意味が理解されていないようである。「have+目的語+過去分詞」という構文の複雑さが原因なのであろう。同じ「主語+動詞+目的語+補語」の文型でも、述語動詞が keep になると正答率は上昇するので、have を用いた構文が影響していると思われる。次の問題である。

Unit 3-4(1) 次の日本語文の意味を表す英文を選びなさい。

「彼女は部屋をきれいにしておいた。」

1. She kept the clean room.
2. She kept the room clean.
3. She kept clean the room.
4. The room kept clean with her.

2 番が正解であるが、解答数は 115 で正答率は 41.4%であった。誤答の中で最も多いのは 3 番で、解答数は 113 であった。1 番は、38、4 番は 10 であった。

keep が関係する問題では問題の形式が違っても誤答について同じ傾向が見られた。

Unit 3-2(7) 次の[ ]の語句を文中に入れて英文を完成させるためには、文中のどこに入るか。記号で答えなさい。

We ア kept イ the ウ door エ . [closed]

正解はエで、正答率は 33.5%である。解答数は、アは 28、 イは 111、 ウは 45、エは 93 であった。最も多い解答はイである。補語にあたる語を動詞の直後に入れる誤りが多く見られ点は上記の Unit 3-4(1)の問題と同じ傾向である。

keep を使った問題は 2 例とも誤りについては同じ傾向を示している。keep clean を「～をきれいにしておく」という意味に、keep closed ～で「～を閉めておく」という意味に考えていると推測される。「主語+動詞+目的語+補語」という文型ではなく、「主語+動詞+目的語」という文型に当てはめようとした結果ではないかと推測される。目的語と補語の関係の理解が不足しているものと言えよう。

また、上記の 3 問を見ると、補語が形容詞の問題よりも、過去分詞の問題の方が正答率は低かった。過去分詞という語形について理解が不足しているのかもしれない。

「主語+動詞+目的語+補語」の文型は動詞の後に二つの要素があるために複雑になっている。同様に動詞の後に二つの要素が続く文型には「主語+動詞+目的語+目的語」の文型があるが、この文型の問題の方が正答率は高い。

Unit 3-4 (4) 次の日本語文の意味を表す英文を選びなさい。

「私は彼女に年賀状を送った。」

1. I sent a new Year's card her.
2. She sent a new Year's card to me.
3. I sent her to a new Year's card.
4. I sent her a new Year's card.

解答数は、1 が 37、2 は 10、3 は 77 で、4 は 152 であった。4 が正解で正答率は 54.7%であった。keep を使った「主語+動詞+目的語+補語」の問題とは違って、二つの目的語の順番が入れ替わる解答は多くはない。誤答では 3 番が多い。語順は理解しているものの前置詞の to の意味が分かっていないということであろう。

「主語+動詞+目的語+補語」の構文の理解度の調査結果は『平成 13 年度小中学校教育課程実施状況調査報告書』に見つけることができる。この調査報告書

には中学校 3 年生を対象に実施された試験の結果が報告でされている。その中に次の二題が含まれている。[　]内の語句をならべかえて、(　)に入る文を完成させる問題である。正答率は、最初の問題が 39.6%、二つ目は 30.0%と報告されている。この結果について、この報告書では構文の理解が十分ではないと評価されている。

A : Have you finished writing your speech?
B: Yes, but it's too long. (　　)
[I it make must shorter]
A : These boxes are too heavy!
B: Yes, they are. Let's (　　)
[ask brother help my to us]

今回の実施した問題の中から同じ趣旨の問題を拾うことができる。二題とも[　]を付けた語句をならべて日本語に合う英文を完成する問題である [4]。

Unit 4-4 (2)
「私たちは親を怒らせた。」
[We] [made] [our parents] [angry].
Unit 10-5(2)
「私は彼に歌うように頼んだ。」
[I] [asked] [him] [to] [sing].

Unit 4-4(2)の問題は上記の最初の問題と同様に、動詞に make を使った「主語+動詞+目的語+補語」の文型の文を作らせる問題である。正解率は、47.1%であった。すでに指摘したように、この文型はあまりよい結果は出ていない。他の調査でも同様の報告があるということは、初期の学習者に共通の弱点と言えよう。Unit 10-5(2)の問題は上記の二題目と同じように「主語+動詞+目的語+補語」の文型の補語が to 不定詞になった文を完成させる問題である。この問題の正答率は、65.6%であった。この構文に関しては、高い正答率である。この構文に

ついては定着が進んでいるということになろう。

3.2.2 後置修飾

『日本人中高生一万人の英語コーパス』は中学生・高校生が書いた英作文を分析した報告書であるが、そこでは後置修飾が苦手分野としてあげられている。関係詞は後置修飾の典型であるが、正答率は高くない。関係詞については、次節で述べるので、ここでは関係節以外の後置修飾の問題を見てみいく。後置修飾には不定詞、分詞、形容詞、前置詞を用いる表現がある。その中でも前置詞句、形容詞句の例を取り上げる。

次の問題は前置詞句の後置修飾の問題である。[　]が付けられた語をならべかえて、次の日本語の意味を表す英語を完成させる問題である。

Unit 3-3 (4)
「大きな耳のとても小さな犬」
[a] [very] [small] [dog] [with] [big] [ears]

正答の解答数は 137 で、正答率は 48.9%であった。誤答に目を向けると、二つの傾向がある。一つは修飾関係の語順はあっているが、冠詞の語順に難があった解答である。次のような解答である。

very, small, a, ears, with, big, dog　(15)
very, small, dog, with, a, big, ears　(20)
very, small, dog, with, big, a, ears　(1)

合計すると解答数は 36 であった。(　)内の数字は解答数である。正答にはなっていないが、「名詞+前置詞句」という基本的な語順は理解されているようである。冠詞に触れる機会は多いはずであるが、冠詞の使い方についての理解が十分ではないようである。もう一つの傾向は、日本語と同じように「大きな耳」にあたる表現から始めている解答である。次のような解答がある。解答数は合計で 30 のぼった。

big, ears, a, very, small, with, dog　(3)
big, ears, a, with, very, small, dog　(6)

big, ears, dog, with, a, very, small　(4)

big, ears, with, a, very, small, dog　(5)

big, ears, with, very, small, a, dog　(12)

こうした解答から、修飾される名詞句と修飾する表現の位置関係が十分に理解されているわけではないということがわかる。

形容詞を用いた後置修飾でも同様のことが見られた。 これも[　]の語句をならべかえて、次の日本語に相当する英語を作る問題である。

Unit 3-3 (2)

「その公園に慣れている犬」

[dogs] [familiar] [with] [the park]

正解の語順で解答した数は、147 で正答率は 52.9%であった。一方、「その公園になれている」という日本語の語順でならべた「the park familiar with dogs」という解答が 71 あった。

日本語と英語では名詞句を形成する修飾関係の規則が異なる。なかでも後置修飾が十分に理解されていない部分であるといえよう。また、冠詞も名詞句を構成する重要な要素であるが、名詞句内での冠詞の位置についての理解も不足しているのかもしれない。

3.3 文法項目

ユニットは文法項目で分けてあるが、ユニット毎の正答率を見ると最も低いのがユニット 12 の「関係節」であり、次に低いのがユニット 8 の「受動態」である。なぜこれらの項目の正答率が低いのかを探っていく。

3.3.1 関係節

関係節内の動詞の語形を誤る事例が多くあったことは既に述べた。これが正答率を下げる一因になっている。それに加えて、関係節を含んだ文を作ることが苦手なようだ。

関係代名詞の基本的な用法は理解されていると思われる。例えば、人間を表

す名詞には who を使うということは十分に理解されている。下記の 3 題はすべて 80%前後の正解率であった。2 番目の問題は省略可能な関係代名詞であるが、「c. 不要」という解答は 27.5%あったが、これも正答として計算した。

Unit 12-1 次の英文の(　　)に who が入る場合は、a を、which が入る場合は、b を、どちらも不要の場合は、c を、選びなさい。
The boy (　　) came out of the car was Ken.
I called up the man (　　) I met in Utsunomiya.
You must not keep fish (　　) grow large in size.
a. who　b. which　c. 不要

意味についてもほぼ理解されているようである。次の日本語の意味を表す英文を選択する問題の正答率は 62.5%であった。しかし、問題になのは、ほとんどの誤答が 1 であることである。1 の解答数は 62 で解答率は 25.5%あった。1 には関係代名詞は含まれていない。関係代名詞が用いられていない文を選択していることから考えると、これらの学生には関係代名詞の基本的な働きが理解されていないのか、関係代名詞の省略が誤解されているということになろう。

Unit 12-2(3) 次の日本文の意味を表す英文を選びなさい。
「駅へ行くバスは 20 分毎に走っている。」
1. The bus goes to the station runs every 20 minutes.
2. The bus that goes to the station runs every 20 minutes.
3. The bus who goes to the station runs every 20 minutes.

関係節を使った文を作る問題を見てみよう。例えば、次の問題では最初の(　)には関係代名詞の which または that が入るが、正答率は 59.6%であった。

Unit 12-3(4) 次の各組がほぼ同じ意味になるように、空所に適当な 1 語を入れなさい。
I will show you some photographs taken by my grandfather.

I will show you some photographs (　　) (　　) (　　) by my grandfather.

多くの学生は関係代名詞を選ぶことはできている。しかし、次のように、which や that を省略した形でたずねると、正答率が下がり、21.0%であった。最初の括弧に which や that を答える解答が多くみられた。which の解答数は 77 で 31%にのぼった。that の解答数は 31 で 12%であった。

Unit 12-3(5) 次の各組がほぼ同じ意味になるように、空所に適当な 1 語を入れなさい。

I hope you enjoyed the book. I left the book on your desk.

I hope you enjoyed the book (　　) (　　) on your desk.

関係代名詞については、基本的な用法は理解されているようであるが、関係詞の省略のようなやや複雑な用法になると理解不足が見られる。

次に、関係副詞の問題を見てみよう。関係副詞の where と when についても、文の意味は読み取ることができるようである。次の問題の正答率は 76.1%であった。

Unit 12-2 (6) 次の日本文の意味を表す英文を選びなさい。

「 私は彼が滞在しているホテルへ車で行った。」

1. I drove to the hotel where he was staying.
2. I drove to the hotel which he was staying.
3. I drove to the hotel who he was staying.

関係副詞を含む文を作る問題では、正答率は高くない。例えば、次の問題である。

Unit 12-3(9) 次の各組がほぼ同じ意味になるように、空所に適当な 1 語を入れなさい。

Put it back there. You found it there.

Put it back (　　) you found it.

上記の問題の正答率は 37.4%であった。関係副詞の用法としては難しかったのかもしれない。誤答としては、that、which が多く見られた。それぞれ解答数は、39 と 33 であった。先行詞が見あたらないという状況にこれらを入れようとすることは、関係詞の理解が不足していることの表れかもしれない。

同じ関係副詞でも when が正解の問題では正答率は 54.3%あった。

Unit 12-3(6)　次の各組がほぼ同じ意味になるように、空所に適当な 1 語を入れなさい。

In 1998, the Nagano Winter Olympic Games were held. My brother was born that year.

In 1998, (　　) the Nagano Winter Olympic Games were held, my brother was born.

この問題では、括弧の直前に時間を表す表現があるので、答えやすかったのであろう。しかしながら、少し複雑になると正答率が下がる。下記の英文の[　]の部分の語を並べ換えて、日本語に合う英文を完成する問題である。

Unit 12-4(7)

「あなたにさよならを言わなければならない日が来ました。」

The day [has] [come] [when] [I] [have] [to] [say] [good-bye] to you.

正答率は 45.3%であった。The day と when が連続していない点で複雑になっている。

関係詞は関係代名詞であれ、関係副詞であれ、基本的な用法は理解されているようであるが、発展的な用法や、複雑な文になると理解は不足しているようである。特に、関係詞を含んだ文を作ることに難がありそうだ。動詞の形を決めるということも関係節を作る際には問題になっている。

3.3.2 受動態

受動態を取り上げたユニットの正答率も低い。受動態は be 動詞と過去分詞を用いる。既にふれたように、be 動詞を主語、時制と一致させる場合に誤りを犯しがちであった。また、過去分詞の語形が関係する間違いも見られた。しかしながら、それだけではなく、「be 動詞+過去分詞」という文型が理解されていないと思われる解答も見受けられる。例えば、次の問題である。

> Unit 8-3(4) 次の 2 つの文がほぼ同じ内容になるように、空所に適当な 1 語を入れなさい。
> When did they build this shrine?
> When (　　) this shrine (　　)?

後の方の(　)には build の過去分詞形を入れる必要がある。正しく built と答えられたのが、104 で、41.6%であった。誤答を見ると、build という解答が 23、building という解答が 5 あった。過去分詞にすることが理解されていない解答と言えよう。過去分詞形にすることは分かっても、過去分詞形を間違えて、builded とした解答が 7 あった他に、bought という解答も 25 あった。

さらに、次の問題でも「be 動詞+過去分詞」の形になっていない解答が見受けられた。

> Unit 8-2 次の英文の空所を(　)の動詞を用いて補いなさい。必要ならば、be 動詞を加えて答えること。例を参考にしてください。
> 例: This window by my brothers yesterday. (break)
> -> This window {was broken} by my brothers yesterday.
> The top of the mountain (　　) with snow every winter. (cover)

この問題の解答の中には、be 動詞を含まない解答が 25 あった。解答した学生の 10%程度は受動態の形を理解していないように推測される。

3.4 語彙

一部の語彙の用法の知識が不足していると考えられる。特に前置詞についての知識は不足がちである。『日本人中高生一万人の英語コーパス』では、「母語話者と非母語話者を隔てているのは、前置詞句の発達である」(p. 118)と指摘されている。今回のテストの対象者は非母国語話者であるが、この指摘のとおり、多くの学生は前置詞を十分に理解しているとは言えない。

3.4.1 前置詞

次の問題で前置詞の意味が分かっているかどうかをたずねてみた。

Unit 2-2 (6) 次の 2 つの英文に共通して入る単語を答えなさい。
You have to come back (　　) 9 o'clock.
The cat was hit (　　) a truck.

正解率は18.4%であった。時間の表現とbyの組み合わせに戸惑ったと推測する。また、同じ大問の次の小問は、36.8%の正解率であった。with の代表的な二つの意味の問題である。

Unit 2-2 (1) 次の 2 つの英文に共通して入る単語を答えなさい。
I saw a man (　　) brown hair.
She cut meat (　　) a knife.

前置詞の意味を考える問題だけではなく、ある特定の名詞と前置詞を組み合わせて用いる表現の問題も正答率は高くない。次の問題は in the morning というよくある表現についての問題である。morning という単語が手がかりになる。解答数は at が 67、in が 142、on が 86 で、正解率は 47.5%であった。

Unit 2-1 (4) 次の英文の(　)に入る最も適切な語句を選びなさい。
The sun sets in the east (　　) the evening.
1. at　2. in　3. on

次の問題では、日を表す名詞に付く前置詞の問題である。April 1st が日付なので on が正解になるが、正解率は 43.8%に留まった。解答数は、at が 41、in が 123、on が 131 であった。

Unit 2-1 (3) 次の英文の(　)に入る最も適切な語句を選びなさい。
The kitten was born (　　) April 1st.
1. at　2. in　3. on

また、名詞以外の表現と組み合わされる場合もあまり正解率は芳しくない。次の問題は、out of という組み合わせをたずねた問題である。

Unit 2-3 (4) 次の英文が日本文の意味を表すように、(　)に適当な語を入れなさい。
「黒い猫が窓から飛び出した。」
A black cat jumped out (　　) the window.

この問題の正答率は 41.5%であった。最も多い誤答は from であった。次の問題は from と to の組み合わせをたずねた問題である。

Unit 2-4 (3) 次の英文が日本文の意味を表すように[　]内の語句を並べかえなさ。
「そのお店は週末は 10 時から 8 時まで開いている。」
[The store] [opens] [from] [10 a.m.] [to] [8 p.m.] [on] weekends.

正答率は 45.5%であったが、The sore opens までは出来ているが、その後が間違っている解答が目立った。

前置詞については、個々の前置詞の意味だけでなく、慣用的な表現もあまり定着していないようである。

3.4.2 冠詞, another, other, one

冠詞の用法が十分には身についていないことは、すでに触れた。しかしながら、冠詞の基本的な用法はある程度理解されているようである。

Unit 1-5 (1) 次の英文が日本文の意味を表すように、(　)に適当な 1 語を入れなさい。

「私は犬を飼っている。その犬はとても大きいが、人なつっこい。」

I have (　　) (　　). (　　) (　　) is very (　　) and friendly.

前半の二つの括弧には 85.0%が a dog と答えた。後半の二つには 69.8%が the dog と答えた。a と the の使い分けの基本的な規則は理解しているようである。しかし、少し細かいことになるが、次の an と a の使い分けの問題の正答率は高くない。

Unit 1-3 (1) 次の日本文の意味を表す英文を選びなさい。

「私の兄は野球で最優秀選手だった。」

1. My brother was a MVP in baseball.
2. My brother was an MVP in baseball.

この問題の正答率は、34.4%であった。音声で an を使うかどうかが決まることが理解されていないようである。

a と an の使い分けも問題ではあるが、上記の後置修飾の例の分析で見たように、名詞句を作る時に、冠詞を名詞句の先頭にすることができないとか、複数形の名詞と a を組み合わせるということの方が重要な問題であろうと思われる。

冠詞と同様に名詞句で用いられる another、one、other の問題を見てみる。二つのものを分けて指すときに one と other の組み合わせが用いられるが、その点を次の問題でたずねてみた。

Unit 1-3 (4) 日本文の意味を表す英文を選びなさい。

「私は猫を二匹飼っている。一匹は白で、もう一匹は黒だ。」

1. I have two cats. One is white, and another is black.
2. I have two cats. One is white, and the another is black.
3. I have two cats. One is white, and other is black.
4. I have two cats. One is white, and the other is black.

4 番の one と the other の組み合わせが正解で、正答率は 34.4%で、解答数は 106 であった。それぞれの解答数は、1 番が 67、2 番が 54、3 番が 78 であった。another を選んだ誤答は 39.3%あった。other、another の用法が理解されていない恐れがある。また、3 番を選ぶということは、the の意味合いが分かっていないのかもしれない。

another については次の問題でもたずねた。

Unit 1-5 (2) 次の英文が日本文の意味を表すように、(　)に適当な 1 語を入れなさい。

「お茶をもう一杯いかがですか。」

Would (　　) like (　　) (　　) of tea?

すべての空所を正解した解答は、28.3%であった。「もう一杯」を表現する another の正解率は 29.9%であった。誤答には a や one が多く見られた。

another、other のように頻繁に用いられるが、使い方に特徴がある単語の用法が十分に定着しているとは言い難い。

4. おわりに

中学校で 2012 年度から、高校では 2013 年度から導入される学習指導要領の中では文法はコミュニケーションを支えるものと考えられ、次のように述べられている。

「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の 4 技能の総合的な指導を通して、これらの 4 技能を統合的に活用できるコミュニケーション

能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。

文法に関する知識は言語活動の基礎となる。知識がなければ活動は限られたものになってしまう。その結果、コミュニケーションも限られたものになってしまう恐れがある。言語活動を豊かなものにするためには文法を理解し定着させることが求められよう。

本稿では、文法問題の解答を分析してきた。文法について学生が苦手とする部分を指摘し、誤答の例も挙げた。弱点が明確になるだけでなく、誤答を分析することで、理解が不足する分野や知識が定着していない部分も明らかになった。こうして得られた知見は今後の授業の一助となるであろう。

様々な有用なデータを手に入れられたのは、コンピュータネットワークが活用できたおかけである。今後も有効な活用法を追求していきたい。

注

1) 2012 年度より同じような機能の別のシステムに変更になった。

2) 問題の形式などについて、前原(2012)で報告されている。

3) 問題を引用する場合にはユニットと問題番号を添えて引用する。問題の指示文も必要に応じて添える。

4) 並べ換える問題については、正解の語順にならべて表記する。

参考文献

文部科学省(2008) 「中学校学習指導要領解説外国語編」 開隆堂

文部科学省(2010) 「高等学校学習指導要領解説外国語編・英語」 開隆堂

国立教育政策研究所教育課程研究センター(2003) 「平成 13 年度小中学校教育課程実施状況調査報告書」 ぎょうせい

前原由幸(2012) 「WebCT を用いた英語文法問題の作成」 帝京大学 LT 開発室年報 9 号

投野由紀夫(2007) 「日本人中高生一万人の英語コーパス」 小学館